

ケッペル作業隊の思い出

山下勇雄

南十字星創刊二十周年
記念復刻版掲載

筆者 山下勇雄さんは旧日本軍の昭

南憲兵隊陀勤務、終戦と同時にシンガポールで抑留生活を送りました。山下さんは今年五月十二日に、戦友の霊をとむらうためシンガポールを訪れ、日本人墓地の清掃を約二ヶ月と続け、七月六日帰国しました。ここにご紹介する文章は、シンガポールに滞在中、宿舎で執筆寄稿された回想録です。原文は四百字詰め約三十枚という長大なものですが、紙幅のつごうもあり、一部を抜粋しました。

(※当時の南十字星編集部)

「終戦」の意味わかる

一九四五年八月十八日、我々はセレター軍港近くの分遣所で去る十五日の玉音放送を聞いた。本日本板垣方面軍司令官よりの訓示を聞いた。その訓示を聞いて終戦が決定した事、そして無条件降伏した事も初めて知らされた。しかし終戦という意味はわかるにしても、無条件降伏という我々にとっては前代未聞の言葉を聞く。一体その真の意味は何であろうか。字句を直訳すれば、日本としては何も条件を出す事なく降伏せよとの意味にとれる。まさしくそうであろうか。議論百出する。

九月五日 連合軍のシンガポールへの上陸が開始される。

九月六日 我々はプキティマ七マイル地点にあった野田醬油工場においてすべての兵器、弾薬そして車輛等を連合軍に引き渡し、武装を解除されたこの日連合軍は、先に決定した命令の一部を次のように変更すると通告した。ジュロン地区残留は、憲兵隊と装備隊の一部および一般邦人のみとし、他の

部隊はただちにジュロンを撤去してジュホール州元脳病院付近に移動せよ。

九月八日 正確には九日午前一時ごろ突然全員が起床させられる。そして連合軍は、日本軍は約三百名、朝八時からシンガポール市内における連合軍の労役に服すべきと命令、予期せぬ事態へとこの日から突入して行った。

九月十三日午前一時ごろ起床させられジュロン地区にいる全軍人はケッペルにおいて作業隊を編成すべしと命令される。朝九時より開始された連合軍の私物検査で必要以外の衣類、革製品、時計、万年筆、タバコ等は全部没収された。午後二時、おりからの小雨をついてジュロンへと行軍開始。目的地ケッペルまで途中休憩等もあり十二時間かかり午前二時忙到着した。途中憲兵将は全員別行動となり刑務所へら致された。

作業隊第一号活動を開始

作業隊（正式には捕虜收容所）となる所は、元日本軍兵器廠資材倉庫跡で

あり、どうにか身体を横にして休むようにするため約一時間かかって整理した。一時間余り仮眠。

九月十四日 午前四時半の起床に始まり、午前五時全員広場に集合し点呼をうけ、早い朝食をすませ作業場へ出発した。一日目の作業はケッペル埠頭内の倉庫で、百キロ詰め俵の積み替え作業であった。敗戦後の第一号作業隊として発足した部隊別の編成は次の通り。

昭南憲兵隊 約二七〇名
南方燃料本部 約八五名
方面軍野自本廠 約一八〇名
高射砲四八大隊 約六〇名
高射砲九四大隊 約一三〇名
高射砲一〇一連隊 約五五名
その他各部隊兵器申送り要員と警備隊員合わせて約二〇〇名

以上のようにシンガポールには当時千人弱の軍人しか残留していなかった。旧日本軍倉庫跡の我々の宿舎は、屋根はルーフィングぶき、簡易木造バラック建て、コンクリートの土間の上にム

シロを敷き、一枚のムシロに二人が頭と足を交互にして寝るのである。電気、ガスは当然使用できず、水は一日に一人バケツ一ばい。それで洗面行水をし、残りで洗たくまでしなければならなかった。

食事は極めて悪く、カロリーは仕事をする人間として最低に抑えられ、朝は現地米にイモを混入したカユがかん詰め空きかに八分くらい。すすれば一秒もかからなかった。昼食は英軍の乾パン三枚と乾燥肉類の油いためがチョッピリ。夕食はイモ入りめしと一汁または一菜。汁は初めは日本軍の乾燥みそを使用、後になって塩汁。タバコは一日三本ずつ。

次に、我々作業隊の当時の状況を記憶をたどりながらつづつてみる。

×日×日 朝から五十キロ詰めセメントの荷役作業。肩の皮膚が破れ、血がにじむが治療は許されず。

×日×日 午前七時仕事開始 昼休みは一時間、夕方七時まで正味十一時間の重労働。一日中ドラム（満タン）の運搬。

辛い炎天下の作業

×日×日 旧日本軍貨物廠跡のスクラップ整理をした。炎天下の作業なので、仕事よりもその暑さをがまんしなければならぬのが辛い。生水をガブ飲みする。汗とホコリで着衣がゴテゴテであった。

×日×日 夜間作業の日だった。夕方七時から朝七時までの労働である。大体十日おきに夜間作業をする。昼間と違って涼しいのが何よりありがたい。次々入ってくる大型トレーラーに建築資材を積み込んだ。

×日×日 トラックにすし詰めになれる。行く先はわからない。車は海岸を東の方へと進んでいる。着いた所はラン飛行場（現在はグラウンドに利用されている）であった。日本軍の残がいちあちこちに散らばっている。完全な飛行機は一機もなし。二十名くらいでロープだけを使う整理作業はとても辛かった。

九月二十四日 昭南憲兵隊全員に対する第一回取り調べがあった。この日伍長以下は残され、軍曹以上四十九名

は全員オートラム刑務所に連行された。初代作業隊長の鈴木憲兵少佐がら致されたので、後任には防衛司令部から石原陸軍少佐が新任された。

下旬に入って食事からくる肉体的な疲労やショックで作業に出られないと診断される者が日ごとにふえてきた。

また空腹に耐えられず土手に生えている雑草を飯ごうで煮て食べた者が集団下痢をした。全隊員の三分の一は隊内休養、重症者は当時ニュースンにあった病院へ運ばれた。筆者もその時全身がむくみ、脚気と診断されたが、四、五日しか休養が取れず、その後は精神力で押し切ったのか、いつの間にか脚気は直っていた。

当時のキャンプ長（我々ケツベル作業隊を取締まる最高責任者、英軍中尉）は、作業隊員の稼動員数がこのように減るのは、日本軍軍医の甘い診断にあるとして、隊員の顔色で（作業可能という意味）と言い、ほとんどが作業にかりだされた。

十月×日 旧日本軍はマレー半島から逐次南下を始め、一大集結地と

なったレンパン島へと移動を開始した。

記録によれば十月十七日先遣隊九百九十名がまず上陸し、十一月末には約三万名、その後も南方各地から集結し、最終的には約八万名の旧日本軍がレンバン、ガラン両島で自活し、復員船を待ったという）

邦人第一陣が帰国

十一月×日 一般邦人の第一陣が我がキャンプの前を手を振り、祖国へ帰って行った。軍隊に籍の無い者の方が幸せだと思う。

十一月×日 市内のあちこちにある旧日本軍の小施設等へ行く事が多くなった。一般住民との接触も多くなるので警戒兵もふえ、我々も覚悟をして作業に臨んだ。というのも日本軍がシンガポールに進駐した際、現地住民を大量虐殺した。現在住民のうらみは計り知れず、我々日本軍への復讐は当然予想されることであった。

第一班は防空ごうの穴埋めをし、他

の班は旧施設等の破壊作業をした。案に違わず、我々の周りを群衆が遠巻きにし、警戒兵のすきを見てはバカヤロ―とののしっている。大声を上げて通り過ぎる車もあり、小石を投げつけ、ツバを吹っかける者もいたが、我々はノルマの達成忙全神経を集中した。宿舎で夕食後体を横陀して今日の出来事を振り返り、ああ今日も一日無事でよかったと考えるしか余裕がなかった。

一九四六年一月一日 全作業隊に一日の休暇が与えられた。作業隊開設以来初めての休み、百十日目の休みだ。

二月六日 当ケッペル作業隊に初めてスマトラの独立混成二十五旅団砲兵隊ほか二百名が転属されてきた。彼らは、スマトラは戦後余り混乱もなく平和だった、ここ（シンガポール）はひどいともらしていた。

演芸隊編成される

二月十七日スマトラからさらに第一野戦飛行隊の約百名が転属してきた。

このころから少しずつだが施設の改善

と休養面陀若干の手心が加えられ、また隊員の中から演芸に従事した事のある者が選出され演芸班なるものが作られた。我々（芸の無い）が彼ら分まで働くことになったが、後日演芸会で彼らは我々の疲れをほぐしてくれた。

三月十日 全シンガポール作業隊司令部が、在シンガポール作業隊は十四ヶ所で、総数約二万二千四百人（非作業隊を含む）と発展。

四月十五日 直属上司である板垣第七方面軍司令官が東京軍事裁判に召喚され、シンガポールを去られた。

五月×日 ビルマ、仏印からと思われる部隊が我々をしり目に逐次内地帰還して行った。その中によく見ると女と思われる兵隊もいた。丸ぼうず、軍帽、軍服を着用し男とそっくりの姿だが、それは敵をあざむくための従軍看護婦の必死の姿だった。

×日×日 旧日本銀行（今の政庁の横にあった）の地下倉庫にあった軍票の廃棄作業をする。一回も使用していない新券である。我々が何万年かかっても使い切れない軍票の山も今は一片

の紙切れである。

×日×日 肉を大型冷蔵庫へ積み込む作業をする。と殺場から運んできた血のついた肉をかついで冷凍庫へつるす仕事である。外が暑いので初めの内は中へ入ったが、しばらくすると入ろうとしない。半そでシャツに半ズボンの軽装なので五分と中に入っただけでいい。その日の作業は辛かった。係の従業員がカップを後で貸してくれたかったら全員凍死していたかもしれない。

五月十二日 我々昭南憲兵隊の約二百名はリババレー作業隊へ転属を命じられた。

「内地帰還」の命令に小おどり

六月五日 夕方、シンガポール作業隊に対し、突如第一回の内地帰還をさせる、総数六五十名という命令があった。順番からして当然我々も含まれていた。夢かと疑った。うれしかった。幸福の二字は我々のためにのみ存在す

ると思った。全員小踊りして万歳を幾度となく叫んだ。

六月七日朝、私物検査が実施された。それも無事済んで全員喜びを隠しきれず勇み足でふ頭へ向かって行進を開始した。少し早目尻ふ頭陀着いた。乗船開始は十七時だと命令が下された。

そこで働いていた他の作業隊員に「我々は先に還るが、これは順位というもの、いたしかたのない事だ。君たちも帰還の日まで無理せぬようがんばってくれ」と、このような励ましの言葉を送った。その時一台のジープがこちらにとばしてくる。ちょうど十五時。（この時間は生涯忘れることはないだろう）英軍の一将校が一人の通訳を伴ってわが朝枝大尉輸送指揮官と何か話している。その動作といい、口ぶりといい何か不吉な予感がした。それは昭南憲兵隊全員に対する乗船中止の命令であった。それを聞いたとたん我々の受けたショックは大きすぎた。だれも言葉が出ず、出るのはタメ息だけ涙は一滴も出なかった。さっきとはうって変わり、重い足取りでケッペル・キャンプへと引き揚げた。

その日から我々は一応容疑者としての汚名を着せられ、作業に出ず、いつ始まるかも知られない取り調べを待つこととなった。

伍長以下は“容疑”なし

七月三十日 約二ヶ月に及ぶ調査

(面接はなく主として書類調査)の結果、昭南憲兵隊に籍を置いた伍長以下全員に対しては容疑なしとの事で明日から再び作業忙出る命令を受け、一同ホッとする。

九月二十九日 第三代目キャンプ長(衛兵司令)にインド兵少尉着任。このころからいくぶん作業も緩和され、作業先からのチョロマカシの要領も覚えた。捕虜生活にもゆとりが出てきたように思う。

ビールの盗み飲み

×月×日 作業先がふ頭だとわかると大きいクツを借用、その中にタバコなら百本くらいは失敬出来た。またかん詰めはその場ですぐ食べて、あきかんをひっくり返し、箱の中に元通りに

置いた。ビールかんにありついた時は顔に出る者は絶対に盗み酒は出来なかった。さいわい私は赤くならないので飲めない友には悪かったが腹いっぱい飲んだ。英語が全然わからなかった我々もかんづめの字はたいいてい読めるようになった。しかしバレーは大変である。作業班長は現場責任者に呼び出されて犯人を処分するよう命ぜられ、キャンプ長に報告が行く。このくらいの罪だとたいいてい隊内管倉入り二日くらいである。運の良い者は一回も罰せられなかったが、運の悪い者は二、三回も管倉入りをした。現場責任者の中には見て見ぬふりをしてくれるのもあった。そんな時は腹も破れんばかり食べることが出来た。宿舎のあちこちには、ギターを作る者あり、歌の練習する者あり、花札する者あり、衣服の補修する者あり、みなそれぞれの事をしている。やがて消灯である。運が良ければ夢の中で祖国の肉親に会えるだろう。それが唯一の楽しみだ。今夜はぜひ会わせてほしいと神様に手を合わせ

十二月三日 数日月前許可された内地への便り(月一回、はがきだけ)が無事届いたのか今日その直信が来た。一年三ヵ月ぶりのご対面である。肉親は、家は、友は、また恋人は、と共に語り、泣き、喜び、涙した。かくて今年も暮れて行く。

元日はタピオカのぞうすい

一九四七年一月一日 元日につき全員休日。午前七時広場に全員集合し、はるか東方に向かって万歳三唱する。新しく来た警戒兵が驚く。バリケードのさくの外を通る現地人もげんな顔でこちらを見ている。日本の兵隊がここで玉碎するのではないかと思ってい

ないほどのおいしさだ。

我々の現在の生活の中心は、食べる事と休息する事だけだ。作業をしても一円の給料もなく、街に遊びに行く事も映画も酒も何もない。私も誕生日が来れば満二十五歳だ。床の中で隣りの友は「オレの女房となるべき女性は、この世の中で今ごろ何をしているだろうか」と話しかけてきた。我々にとつて出征とは死ぬことだ。生きて祖国の土を踏むことほとうてい考えられないから帰ったら結婚しようという約束などは出来るはずがなかった。隣りでいびきが始まった。私も休むことにしよう。

二月九日 今日限りでケツペル作業隊は閉鎖される事となる。最後までここにいた五三十名は島の北部にあるウッドランド作業隊へ引越した。

引越越し先のキャンプはゴム林を切り開いた、とても気持ちのいい所で、今までのようなバリケードもなく、警戒兵すらいなかった。逃げようと思えばいつでもOKだった。しかし毎日の生活妃は変化がなかった。

×月×日ドブの清掃をした。初めは

猛烈な悪臭に悩まされたが、近ごろでは平気になった。捕虜生活も板についてきたとも言える。住民の中にも我々に同情してくれる者も出てきた。チョイチョイ食べ物を与えてくれ、タバコには不自由しなくなった。以前のような悪口を浴びせられることもなくなった。

三月も終わるところとなると、キャンプ内に県人会がいくつか発足、内地帰還促進委員会も誕生した。一日も早く帰還出来るよう各方面に働きかけることが目的だったが、連絡方法もなく苦勞した。

ついに出了た帰還命令

四月二十二日 その日がついに来た。夕方近く、我々約二百名に対する内地帰還命令が出た。一年十カ月に及ぶ作業隊の生活が終わるのだ。永かった。実に永かった。色々な出来事があった。それでもみんな協力し、助け合ってきた。苦境の中にあつて人間の表裏をしみじみ見せつけられた。そし

て今我々に出来る最大の孝行とは五体満足そろつて両親の前に立つ事だけである。しかし数多くの戦友は今日のこの喜びを共に味わうことは出来なかった。

四月二十八日 我々はいに復員船に乗った。悲喜こもごも複雑な気持ちであつた。ある者は友の遺品を抱いて感泣しているに違いない。船は静かに岸壁を離れた。

十六時三十分である。シンガポールよさようなら、と幾度となく心の中で叫びながら私は落日を受けて速くなる港をこの眼に焼きつけた。

(南十字星一九七九年・四号)